| ７－０３ | 様式３ |
|---|---|

| | |
|---|---|
| 主題 | 今までの看取りケア　これからの看取りケア |
| 副題 | ～幸せな最期を迎えるために～<br>『私たちに出来ること』 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 看取りケア | | 研究期間 | １２ヶ月 |

| | |
|---|---|
| 事業所 | 社会福祉法人聖風会　特別養護老人ホーム・扇 |
| 発表者：岡安　里美（おかやす　さとみ） | アドバイザー：東　理江（あずま　りえ） |
| 共同研究者：鎌田　めぐみ（かまた　めぐみ） | |



| | | | |
|---|---|---|---|
| 電　話 | 03-3856-1199 | E-mail | oogi@seifuukai.or.jp |
| ＦＡＸ | 03-3856-1711 | ＵＲＬ | http://www.seifuukai.or.jp/ |



| | |
|---|---|
| 今回発表の事業所やサービスの紹介 | 社会福祉法人聖風会が運営する特別養護老人ホームです。平成５年に足立区の扇で開所、特養７６床、ショートステイ４床、デイサービスセンター、ケアマネージメントセンター、地域包括支援センター、ヘルパーステーションが併設されています。近くには日暮里舎人ライナーが通り、施設前はコミュニティバスのバス停というアクセスが便利な施設となりました。 |

**《１．研究前の状況と課題》**

最後までの看取りが出来ない当施設。しかし延命を希望せず、施設内での看取りを希望される方が９割以上を占め、その要望に応えるため協力病院の協力を得ながら「可能な限りの看取り」を行ってきた。平成２０年から協力病院が変更となり医師の意向もあり入所時に「看取りの同意書」をもらうことになった。これを受け出来る限りの看取りケアを行ってきた。しかし、必要最低限のケアの提供に追われ、その方の過ごす環境への配慮、寄り添うケアが十分に行えていなかった状況があった。こういった状況から看取り期のケアに対して「介護職として何ができるのか」という課題が出てきた。また、看取り期の状態変化や急変時の対応に不安が残っている現状である。

**《２．研究の目標と期待する成果・目的》**

看取り期のご利用者に対し、職員皆で何ができるのか、今までの看取りケースから振り返りを行い、改めて人生の重さや専門職としての意識の向上を目指す。そして、ご利用者が自然な死を迎えるにあたり、必要な知識を身につけ、整った環境で寄り添いを大切にした看取りケアの提供を目的とする。

## 《3．具体的な取り組みの内容》

１）入所時、終末期の看取り同意書

入所時、相談員よりご家族に当施設での看取りについての説明後「看取り同意書」を記入してもらう。終末期になった際には再度説明し、意向の確認を行っている。

２）食事・ケアについての取り組み

多職種によるケアカンファレンスを実施、本人・家族の意向をもとにケアプランを作成している。食事摂取量が低下しているご利用者に合わせて、ケアワーカー・栄養士・ＮＳ立ち会いのもと相談・検討している。介助方法についても随時検討し、ケアワーカー同士で情報交換・共有を行っている。

３）個別急変時の対応（フローチャート）

看取り期になると、ご利用者１人１人に合わせたフローチャートを相談員が作成している。

４）看取り入院、急変時の対応

５） 職員へ向けてアンケートと振り返り

今までの看取りについてのアンケートを２・３階ケアワーカーへ実施し、フロア会議で振り返りを行った。

## 《4．取り組みの結果と考察》

１）入所時に看取りについて同意書をいただいているが、入所時に本人ご家族が終末期に対して向き合うことが難しい方もいる。終末期になった際に再度、意思確認を行っているが、入所の段階から徐々に最期を準備する意識を持っていただけるように、今後も説明をしていく重要性を感じた。

２）現在約７種類程の高栄養食品、栄養補助食品の中からその方にあった食事内容・介助方法を行ってきた。現在も徐々に食品の種類を増やしながら提供ができるようになっている。ご家族の面会時の差し入れや、ご利用者が好きだったものを提供するための工夫も行っている。

《事例》Ｓさん・（女性）看取りプラン

３）急変時の対応が一覧になっているため、連絡・連携がスムーズにとることができ、職員が落ち着いて対応することができている。

４）アンケートを実施したことで、職員１人１人の気持ちを知ることができ、振り返りや今後するべきことが見えてきた。

## 《5．まとめ、結論》

看取りケアに対するアンケートを行い、実際に看取りケアに携わり、普段の関わりの中でその方の望むことや、楽しめること、心地良いと感じることが読み取れていたことが分かった。また、ご家族の面会時に近況報告をしながら関係を築き、ご利用者の昔の様子や家族の思いを聞いたりすることで、ケアへの反映や一緒に関わっていく心構えができることが分かった。ご利用者にとって最期まで気持よく生活ができるよう、その方の生活環境へのきめ細やかな配慮を行うことが重要である。

食事ケアについては、できる限り工夫し食事の提供ができていた。しかし、看取り期のご利用者への介助は提供した１口が生命の消耗や死につながることがあるため、状態観察を注意深く行い、その日の状態に合わせた介助を行うことが大切であり、そのために他職種との連携や必要に応じて協力を得ることで現場の不安感の軽減につなげていくことができる。

## 《6．倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

## 《7．参考文献》

はじめてでも怖くない自然死の看取りケア
著者名：川上　嘉明
発行所：ＭＣ　メディカ出版

## 《8．提案と発信》

ご利用者が穏やかな最期を迎えられるように、ケアに携わる全ての職員が、最期に向かう自然な経過を理解し、チームとなってケアに努めていく事が大切である。

【メモ欄】